

イラン・イスラーム共和国のイデオロギー

— 小学校国語教科書の内容分析 —

さくら
桜 井 啓 子

はじめに

- I 教科書改訂の背景
 - II 革命後の教科書の改訂率
 - III 内容分析について
 - IV 革命前と革命後の教科書の比較
- 結 論

はじめに

革命後のイランは旧体制のイデオロギーである西歐化を徹底的に否定し、イスラーム化をもって新体制の指針とした。イラン・イスラーム共和国の政府は、このイスラーム化の名で呼ばれる新しいイデオロギーを普及させるために、新聞、テレビ、ラジオなどのマスコミュニケーション手段、モスクをはじめとする宗教施設、各種教育機関をその監視下に置き、これらを通じて、ホメイニーをはじめとする政府の指導者たちによる政治宣伝を絶えず行なってきた。したがって、これら、民衆動員のために行なわれる政治宣伝やさまざまな政策提言を分析することによってイスラーム化の内容を明らかにすることもできる。ただ、政府の指導者たちの言動は、革命後も続いた国内の権力闘争や対外関係の変化に非常に左右されやすいという特徴がある。

イラン・イスラーム共和国のイデオロギーを明

らかにするためには、このように、その時々^の政治状況によって変化するようなイスラーム化のための政策ではなく、より基本的で、かつ革命直後から今日に至るまで、ほぼ一貫しているものを析出することが重要であろう。そのために、本稿では先にあげた民衆教化の諸手段のうち、相対的に政治変動の影響を受けにくい教育機関、それも特に初等教育機関の教育内容を考察することで、イラン・イスラーム共和国のイデオロギーの特質を探ることとする。その材料として、ここでは、小学校の国語の教科書を選んだ^(註1)。

イランでは革命以前から小学校の教科書は国定である。文部省は革命直後に、教科書の改訂を行ない、それ以後、ほぼ同様のものを今日まで使用している^(註2)。1984年の小学生数は600万と発表されているが^(註3)、当然この数は上級の学校に進むほど減少する。したがって、小学校は基礎的なイデオロギー教育の場として最も影響力があると考えられる。また、小学校の時間割を見ると革命後も国語の時間が圧倒的に多い^(註4)。

4年生の場合を比較すると、週28時間中8時間^(29%)が国語にあてられている。さらに、学年が下がるほど国語の時間数は増加していることから、国語の教科書は教科書のなかでは最も使用頻度が高いものと推測することができる。また、社

会科や道徳の教科書も政府のイデオロギーを知るよい材料ではあるが、小学校に関するかぎり次のような欠点がある。まず、社会科が教えられるのは3年生以降である。4年生の場合、革命前は週28時間中2時間(7冊)、革命後は週28時間中3時間(10冊)があてられているにすぎない。また、同じく4年生の道徳の時間を比較すると革命前は週28時間中2時間(7冊)であるのに対し革命後は週28時間中5時間(18冊)と差がある。さらに、道徳(宗教)の教科書は革命前からウラマーが執筆に携わっており、体制側の検閲にもかかわらず、他の教科書にくらべ反体制側の見解を入れる余地があったとの証言がなされているために(注5)、革命前のイデオロギーを知る手掛かりとしては適切ではない。以上のことを考え合わせると、国語の教科書は、革命前も革命後もともに使用頻度が高く、かつ内容が社会、歴史、文化、生活、道徳、宗教と多岐にわたっており、文科系の教科が未分化な小学校教育においては、文科系の総合テキストとしての役割を果たしていることから十分によい材料になると考えた。

以下で、革命前および革命後の教科書の内容分析を行なうが、その前に、革命後の教科書改訂の背景について触れておきたい。

(注1) 本稿で使用する教科書は以下の10冊である。

革命前の教科書

Fārsī: avval davestān (1353/1974)[ペルシア語: 小学校1年生]。

Fārsī: dovvom davestān (1353 ~ 1354/1974 ~ 1975) [ペルシア語: 小学校2年生]。

Fārsī: sevvom davestān (1353 ~ 1354/1974 ~ 1975) [ペルシア語: 小学校3年生]。

Fārsī: chahārom davestān (1349/1970) [ペルシア語: 小学校4年生]。

Fārsī: panjom davestān (1350 ~ 1351/1971 ~ 1972) [ペルシア語: 小学校5年生]。

以上、文部省 (Vezārat-e Amūzesh va Parvaresh) 編。

革命後の教科書

Fārsī: avval davestān (1364/1985)[ペルシア語: 小学校1年生]。

Fārsī: dovvom davestān (1360/1981)[ペルシア語: 小学校2年生]。

Fārsī: sevvom davestān (1361/1982) [ペルシア語: 小学校3年生]。

Fārsī: chahārom davestān (1361/1982) [ペルシア語: 小学校4年生]。

Fārsī: panjom davestān (1364/1982) [ペルシア語: 小学校5年生]。

以上、文部省編。

(注2) 1982年の教科書と85年の教科書を比較すると挿絵や若干の文章の違いがある場合もあるが、本質的な変化は見られない。

(注3) “Educational Changes and Trends in Iran,” *Teheran Times*, 1984年12月15日。

(注4) 革命前の小学校4年生の時間割(1週)は、国語(国語, 作文, 習字, 詩)8, 算数6, 理科3, 社会2, 体育2, 図画1, コーラン(宗教, 道徳)2, 英語4, 合計28時間(大野正雄「イランの教育復興」[『中東通報』第259号 1978年] 21ページ)。残念ながら、その他の学年の時間割は入手できなかった。

革命後の小学校の時間割(1週)

小学校の教育科目		(単位: 時間)				
教科		1年	2年	3年	4年	5年
1.	コーラン	—	—	2	2	2
2.	宗教・倫理	*	3	3	3	3
3.	読解・文法	12	9	5	4	4
4.	書き取り	*	*	3	2	2
5.	作文	*	*	1	2	2
6.	社会	*	*	2	3	3
7.	理科・衛生	3	3	3	3	3
8.	算数・幾何	5	5	5	5	5
9.	図工	2	2	1	1	1
10.	書道	—	—	1	1	1
11.	体育	2	2	2	2	2
計		24	24	28	28	28

(出所) Minister of Education 編, *Educational System of the Islamic Republic of Iran*, テヘラン, 1985年, 31ページ。

(注) *は読解文法の一部として教えられている。3~5が国語である。

(注5) 駒野欽一訳「ある宗教指導者の自伝——パーホナル元首相エッテラート紙に語る——」(『中東通報』第287号 1983年) 50~51ページ。

I 教科書改訂の背景

革命後のイランでは、旧体制の遺産である教育制度の徹底的な見直しが行なわれた。改革は、教育の制度的側面と内容の双方におよび、初等教育から高等教育に至るまで行なわれた。

小学校、中学校、高等学校の改革は文部省の指導下で実施された。学校は、宗教学校(マドラサ)を除いて、すべて国の監視下に置かれ、イスラーム的価値の普及という名目で各種の改革が導入された。大学以外はすべて男女別学となり、女子学生のチャードル着用が義務化された。その他に、カリキュラムの修正や教員の再教育、農村への学校の普及、文盲撲滅対策など、さまざまな取り組みがなされている(注1)。

ちなみに、現在のイランの教育課程は、幼稚園1年(5歳)、小学校5年(6~10歳)、中学校3年(11~13歳)、高校4年(14~17歳)、大学(18歳以上)となっている(注2)。

これらの制度的な改革と並行して、教育内容の改革が推進された。革命後、文部省が発行した『イラン・イスラーム共和国の教育制度』というパンフレットに次のように説明されている。

「前政権の教育計画者たちは帝国主義的態度にもとづく非人間的な文化の宣伝のために各教科の教科書を執筆していた。崩壊した前政権の役人たちは、歴史の教科書を通じて腐敗した君主制と専断的で非人間的な政府を神聖な権力として描き、生徒たちに影響を与えてきた。社会科学の教科書は宗教の真実を隠蔽するような考え方を生徒たちに身につけさせるための手段として利用され、また生徒たちの宗教的信仰をはぎとり、さらにはイスラームを消滅させようとする努力がなされていた。

だが、イスラーム革命の勝利のおかげで、イマーム・ホメイニー師の指導のもとでイスラームの公正にもとづく世界観を普及するための教育への道が開かれた。

そのためにも、教科書の改訂に着手してきた。イスラーム革命の勝利後、2年間にわたって教育調査計画機関が、独裁的な前政権の腐敗と過ちを一掃し、教科書の浄化に従事してきた」(注3)。

改訂された新しい教科書は、1979年度の新学期には各学校に配布されたようである(注4)。

(注1) “Educational Changes and Trends in Iran,” *Teheran Times*, 1984年12月15日, 16日連載。

(注2) Minister of Education 編, 前掲書, 38ページ。

(注3) 同上書 21ページ。

(注4) 革命後の教科書の裏表紙に1979年度からこの新しい教科書を使用することになったと記されている。

II 革命後の教科書の改訂率

具体的な内容を扱う前に、まず、教科書の「章」を単位に革命後の教科書の改訂率をだした。国語の教科書は全くの白紙から作成されたわけではなく、革命前の教科書をベースに、現体制の意向にそぐわない部分を書き換えたものである。書き換えにはいくつかのパターンがある。各学年の教科書の半分近くが全面的に書き換えられている。なかには題だけ全く同じで、挿絵や文章を全く新しいものに置き換えている「章」もある(注1)、半数は、題、文章、挿絵のすべてが新しくなっている。このように全面的に書き換えられた「章」のほとんどが、シャーヤパフレビー王朝についての紹介、ゾロアスター教や古代イランの伝統に由来する祭日などをテーマにしたものである。これらは、革命を称える文章や宗教的な教訓話にとってかわられた。たとえば、小学校2年生の教科書の場合、革命前の教科書にある第4章「小学校の最初のお祝い」、第5章「2年生のクラスでのメヘルガンのお祝い」(注2)、第6章「アーバン月4日 皇

帝誕生日」, 第7章「皇太子」, 第21, 22章「グーグーリー・グーグー」, 第30, 31章「12人の兄弟たち」, 第32章「チャハール・シャンベ・スウリー」^(註3), 第33, 34章「ノウ・ルーズ」^(註4), 第35, 36章「シーズダ・ベダル」^(註5), 第39章「言うことを聞かないひよこ」(詩), 第42章「親愛なる息子よ」(詩)が革命後, 削除された。このなかで, おんどりの話である第21, 22章, および1月から12月の話である第30, 31章, および第39章と第42章の詩は, 特にイデオロギー的なものを含んではいけないのに削除されている。革命後の教科書では, これらに代わって次のようなものが導入されている。第4章「神の力」(詩), 第9章「平等」, 第15章「難民の子供からの1通の手紙」, 第17章「おとうさんとおかあさんのために良いことをしましょう」, 第21, 22章「勝利への道」, 第24章「親切と寛容」, 第27章「私たちの友人」, 第30章「ノウ・ルーズのお祭り」, 第31章「ファルバルディーン月11日 イスラーム共和国の日」, 第33章「子供たちに親切だった私たちの預言者」, 第34章「自由のための叫び」, 第35章「孤児をいたわりましょう」, 第36章「なんとすてきな果物」(詩), 第37章「労働者の権利」, 第38章「ある出来事」。また「章」の一部が修正されたものも多く, その場合は, 文章の追加や削減, 登場人物の名前の変更, 挿絵や写真の置き換えなどがなされている。特に目立つのは, 神の教えや神への感謝, 賛美を述べた文章の挿入と挿絵の女性にチャドルを着用させている箇所である。

以下はその一例である。革命前および革命後の3年生の教科書のそれぞれ第20章と第9章にある「献身的な農夫」という物語は, 嵐で線路に落石があるのを見付けたリーズ・アリーという青年が, 近づいてくる列車に命懸けで危険を知らせる

というものである。ところどころに言い回しの違いはあるが, 物語全体の筋書きは革命後も変化していない。ただ, 文末に次のような文章が挿入されている。

「皆, 彼に感謝しました。乗客たちは彼にほうびをあげようと思いました。リーズ・アリーは言いました。私は, 神のために, また, あなたがた兄弟, 姉妹, そして祖国を救済するためにしたのです。私のほうびは神のもとにあります。そして, 神が最高のほうびを私に下さるでしょう」^(註6)。

また, 名前が書き換えられているものでは, 次のようなものがある。革命前および革命後の3年生の教科書のそれぞれ第5章, 第6章にある「イブン・シーナー小学校, 3年生のクラス委員」に登場する生徒の名前が, ホマー, ナスリーン, ザリー, パルビーンという女の子の名前から, アリー, ハサン, サイド, レザーというイスラーム的な男の子の名前に変えられている。

革命前と同一のものがそのまま掲載されている「章」もある。これらの多くは詩である。詩以外

第1表 革命後の国語教科書の改訂率

題 文 挿 絵	小学2年		小学3年		小学4年		小学5年	
	章	%	章	%	章	%	章	%
◎ ◎ ◎	5	13.6	1	2.9	3	8.6	3	8.3
◎ ○ ◎	10	26.3			1	2.9		
◎ ◎ ×	6	15.9	1	2.9	2	5.7	3	8.3
△ ◎ ×					1	2.9		
◎ ○ ×			2	5.9	3	8.6	4	11.1
◎ △ ◎	3	7.9	5	14.7	2	5.7	1	2.8
◎ △ ◎							1	2.8
◎ △ ×			3	8.8	2	5.7	2	5.6
○ × ×					1	2.9		
○ △ ×					1	2.9		
× × ×	14	36.8	22	64.7	19	54.3	22	61.1
合 計	38		34		35		36	

〔出所〕 筆者作成。

〔注〕 ◎: 全く同じ(挿絵の場合は全く同じか, 全く存在しない場合)。○: ほぼ同じ(単語の修正など)。△: 一部修正(文章の追加, 削減など)。×: 全く異なる。

では動物を主人公とする童話や日常生活を描いたものが多い。第1表が改訂率を示したものである。なお、小学校1年の教科書は文字の学習を中心として編成されており、章だてがはっきりしていないために省略した。

(注1) 革命前および革命後の4年生の教科書に掲載されている「愛すべき祖国」という章がそれにあたる。

(注2) メヘル月の1日(西洋暦の9月21日)の秋祭り。

(注3) ノウ・ルーズ(イランの新年)前の最後の水曜日(注4)をさし、この日の夕方、各家庭は中庭や表通りでかがり火を焚く。

(注4) イランの新年(西洋暦の3月21日)。

(注5) 新春13日をさす。この日に家に留まるのは不吉だとされ、人々は皆、屋外で1日を過ごす。

(注6) *Fārst: sevjom davestān* (1982) [ペルシア語: 小学校3年生], 46~47ページ。

III 内容分析について

ここでは、革命前および革命後の小学校の国語の教科書、計10冊のうち練習問題などを省いた本文のみを対象にそこで使用されているキー・シンボル(key symbol)に焦点を当て、それらシンボルの比較をつうじて、革命後の教科書の特徴を明らかにしようとした。内容の変化を浮き彫りにするために、事前に筆者が教科書に目をとおり、特に著しい変化が見られるという印象を受けた領域を選び出し、これを17のカテゴリーに分けた(注1)。以下がそのカテゴリーである。

- (1) 国家に関するシンボル
- (2) パフラビー国王一族に関するシンボル
- (3) 歴史上の王・王朝に関するシンボル
- (4) 神話・伝説上の人物に関するシンボル
- (5) 王に関する一般的なシンボル
- (6) 祭日に関するシンボル

- (7) イランの文化・文化人に関するシンボル
- (8) 革命のシンボル
- (9) 被抑圧者に関するシンボル
- (10) 抑圧者に関するシンボル
- (11) イスラームに関するシンボル
- (12) シーア派に関するシンボル
- (13) 道徳的価値を表すシンボル
- (14) マイナスの道徳的価値を表すシンボル
- (15) 外国および外国人に対するシンボル

(非西洋諸国)

- (16) 同上 (西洋諸国)

- (17) 開発・発展に関するシンボル

次に、これらの17のカテゴリーのいずれかに当てはまると思われるシンボルを抜き出し、その数をカウントした頻度表を作成した。その場合のシンボルは名詞、形容詞にかぎり、ペルシア語の複合動詞を構成している名詞、形容詞は省略した。

このように、ある特定のシンボルをカウントし、その使用頻度を論じるうえで次の事柄が前提となった。(1)顕在的な内容は何らかの意味を持つ。(2)ある特定のコミュニケーション内容の頻度は何らかの意味を持つ(注2)。

なお、全く同一の単語が異なる意味に使用されている場合で、一方が上記のカテゴリーとは無関係な意味に使用されている場合はカウントしなかった。

(注1) この方法は次の論文を参考にしている。

Yakobson, Serguis; Harold D. Lasswell, "Trend: May Day Slogan in Soviet Russia 1918~1943," Harold D. Lasswell; Nathan Leites, *Language of Politics*, ニューヨーク, George W. Stewart Publisher, 1949年。

(注2) Berelson, Bernard, *Content Analysis in Communication Research*, ニューヨーク, Hafner Publishing Company, 1971年, 18~20ページ。

IV 革命前と革命後の教科書の比較

頻度表（本稿末尾）を概観すると、革命前、革命後ともに教科書が非常に政治的なシンボルを多く含んでいることがわかる。革命前はシャーをはじめとする王に関するシンボルが圧倒的に多く使用されている。革命後はイスラームに関するシンボル、革命のシンボルの導入に加え、道徳的シンボルの増加が見られる。もう少し詳しく各カテゴリーについて見ていきたい。

カテゴリー 1の国家に関するシンボルは革命後、2分の1に減少している。革命前の教科書では学校生活のなかに国旗や国歌が積極的に取り入れられている様子が描かれているが、革命後の教科書からは姿を消した。しかし、国家に関するシンボルのうち最も減少しているシンボルはイラン、イラン人である。革命後はこれらのシンボルに代わるものとして、イスラーム共和国(カテゴリー 8, 12回)、ムスリム(カテゴリー11, 42回)が使用されている。一方、国家・国民そのものを示すシンボルは増加していることに注目したい。

カテゴリー 2のパフレビー国王一族に関するシンボルは当然のことながら革命後はほとんど姿を消した。わずかに登場しているものはマイナスのシンボルへと転化している。革命前の教科書には必ずシャー一族の写真が数ページにわたって掲載され、さらにそれぞれの紹介のために何章かが割かれている。シンボルの使用頻度の多さからも前政権がいかにシャーの存在を児童のなかに定着させようとしていたかが窺える。

カテゴリー 3は歴史的に実在した王や王朝名である。革命前もそれほど使用頻度は高くないが、革命後は全く使用されなくなっている点に留意す

る必要があるだろう。革命が王制を否定した以上、王の名前は当然のことながら、王朝による歴史の時代区分もなるべくなら避けたいようである。

カテゴリー 4の神話・伝説上の人物はいずれもイラン最大の民族叙事詩である『王の書』^(註1)によるもので、アーリマン以外はすべて王の名である。革命前の教科書では3年生からこれらの王者たちの物語が数章づつ連載されており、王によるイラン支配の伝統になじむように工夫されている。

カテゴリー 5は、上述の王者たちの物語などで使われている王に関する一般的なシンボルである。カテゴリー 4, 5のシンボルはいずれも革命後は全く姿を消した。ただひとつの例外であるザッハークは別名蛇王と呼ばれている悪名高き王の名である。それだけが、革命後も使用されており、王=悪であるとする革命後のイデオロギーを象徴している。

カテゴリー 6は、ノウ・ルーズをはじめとする祭日に関するものである。ノウ・ルーズ以外の祭日、チャハール・シャンベ・スウリー、シーズダ・ベダル、メヘルガーンは革命後、言及されなくなった。ノウ・ルーズに対する扱いも変化している。イラン太陽暦(ペルシア暦)の新年元旦(西洋暦の春分3月21日)に当るノウ・ルーズは春の到来を祝う最大の祝日である。今日のノウ・ルーズは、いわゆる宗教的な行事ではないが、その起源はゾロアスター教にある^(註2)。

革命前の3年生の教科書ではノウ・ルーズの起源は次のように説明されている。

「この日、ジャムシード王は牛の背にまたがり悪魔との戦いに出掛け、悪魔たちを打ち負かして、ファルヴァルディーン月の6日に、完全な勝利を得て帰還

し、多くの宝石や金を戦利品として持ち帰ったと言われている。ジャムシード王の命令で、これらの宝石や金で玉座を作った。……その日、大勢の人々が祝辞を述べにシャーを訪問した。窓から差し込む日の光が、宝石や金に当って輝いていた。そして色とりどりの輝きや光があたり一面を照らしていた。喜びに溢れた人々はこの勝利の日、ジャムシード王に宝石をふりかけ、この日をノウ・ルーズと呼んだ」(注3)。

これに対して、革命後の3年生の教科書は次のようにノウ・ルーズを扱っている。

「私たちイラン人は、美しい春の第1日目を祝います。私たちは友人や親戚に会いに行きます。そしてノウ・ルーズの到来を互いに祝います。私たちは毎年、イランのイスラーム革命の勝利もノウ・ルーズとともに祝福します。自由の春を自然の春とともに祝います。また、ノウ・ルーズの日々を『イスラーム共和国の日』とともに祝います。……私たちイラン人は毎年ノウ・ルーズには、イランとイスラームの自由のために自らの魂を捧げたすべての戦いの殉教者たちを称えます」(注4)。

革命前と革命後のノウ・ルーズの扱いの違いは、両政権の性格を端的に示している例であろう。シャーは自らを歴代の王たちの伝統のなかに位置づけることによって、パフレビー王制を正当化してきた。そのため、革命前の教科書には神話や伝説上の王者たちの物語が再三登場する。ノウ・ルーズもまた神話のなかの英雄ジャムシード王とともに説明されている。

一方、革命後は国民的な祝日であるノウ・ルーズと4月1日のイスラーム共和国樹立記念日とを結び付け、これらを同時に祝うことによってノウ・ルーズの性格を変えようとしている。季節のうえでの春の到来と政治的勝利とを結び付け、さらには革命の殉教者を称える日としている。ジャラル・マティニはこの点を指摘し、「伝統的な古代の春の儀式であったものが、犠牲の記念日、生命の価値が格下げされ、死が祝福される日になって

しまっている」(注5)と批判している。

カテゴリー7は、イランを代表する詩人や学者などである。教訓的な詩を著したサアディー(注6)の作品は革命後も多く掲載されているが、ハーフェズ(注7)の詩は姿を消した。また、ルーダキー(注8)の紹介のために、5年生の教科書で1章が割かれていたが、これも削除された。フェルドウシーの作品は、革命後も掲載されているが、『王の書』への言及は避けられている。ゾロアスター教に関するシンボルは革命後は登場しなくなった。革命前の教科書は7世紀にイスラームが侵入する以前のイランの歴史や文化を重んじているが、革命後は敢えて言及されなくなった。

次に、革命後の教科書に華々しく登場するカテゴリー8の革命に関するシンボルを見てみたい。ホメイニー、イスラーム共和国などの革命用語が多数導入されているが、そのなかで特に目を引くのが全体のおよそ36%を占めている殉教に関するシンボルである。シャーの時代にも犠牲(feda)や自己犠牲(fedakar)というシンボル(カテゴリー13)は使用されていたが、革命後はこれらに加えて、殉教(shahadat)や殉教者(shahid, shohada)というシンボルが頻繁に使用されている。革命後の教科書にみられるこれらのシンボルは以下で説明するように革命や国家のために命を捧げることを意味するシンボルとして使用されているため本来は宗教用語であるが、ここではこのカテゴリーに入れた。これらのシンボルが実際にどのように使われているか、それぞれ例を挙げてみたい。

革命前の4年生の教科書につきのような一節がある。

「もし、ある日イランが困難に遭遇したならば、それに対して私の命はどのような価値があるのでしょうか。その時、私は自ら進んで祖国を守るために、私の

命を犠牲にするでしょう」(注9)。

祖国のために命を捧げるといふ文脈で犠牲といふシンボルが使用されているのは、小学校の全教科書を通じてこの一節だけである。

一方、革命後は宗教的な用語である殉教が次のような脈絡で使われている。

「殉教者たちは何を叫んでいたのだろう。皆『独立、自由、イスラーム共和国』と叫んでいたのだ。皆『私たちが生きている限り、ホメイニーは私たちの指導者』と叫んでいたのだ。そして、独立と自由とイスラーム共和国のために叫び、その途上で殉教を遂げ、あの世へといった」(小学校2年生)(注10)。

「私の国の独立と栄光を守るために、喜んで殉教しに行きます。そして、情熱をもって私は死を捧げます。私は名誉ある死が無意味な生よりもよいと信じています。いかなる理由があっても捕虜にはなりません。誇りをもって戦場へ行きます。私は戦います。そして殉教と名誉の二つを選び取ります」(小学校4年生)(注11)。

このほかにも、殉教者を賛美した詩があるので紹介したい。

イラン、私たちの家
すばらしく愛しい かぐわしのイラン
永遠なれ ああ われらが棲家
好ましき イランの町々
山あり野あり 小川あり
イスラームの太陽 もう一度
おまえの輝き 神は偉大なり
ここかしこ 殉教者らの血が
流れてたえることなし ああ イランの大地に
通りや街角に 野のほとりに
チューリップが咲きほころぶ イランに捧ぐ わが命
(小学校1年)(注12)。

おお 殉教者よ
永遠の歴史に生きる おお 殉教者よ 導きの光
希望の証
汝の血の一滴一滴が戦場で 無数の小川や河川やう
なる洪水をつくりだす
汝の努力が戦場で 多くの策略や欺きや偽善を暴き
出す

徳と信心の証 公正の木 汝の純粋な血は大空へ広がる
汝にこそ殉教がふさわしい、というのは神が この
衣服を自由な者たちのために裁断されたから
二つの世界にまたがる赤き血 汝は真の殉教者 汝
の大地からどんなチューリップが咲くか見よ
預言者たちのメッセージの旗を掲げよ 汝は勝利の
国から多くの約束をもたらす
汝の革命的な怒りは落雷のように 不浄な悪魔に火
を放つ
われわれにどうして悲しみの場が必要であろうか
真理のために死んだ殉教者よ かくして汝の死は
新しい生命
殉教を誇りにするのは偉大な国民 殉教にむかうの
は偉大な国民

(小学校5年)(注13)。

このような殉教者崇拝は、イラン・イラク戦争を継続していこうとする現政権の国民教育の根幹をなすものと考えられる。

次に目立つのは、革命に関するシンボルとともに使われている被抑圧者を表す多様なシンボルである。これらのシンボルの特徴は具体的な社会階層を表していないことである。シャーに対するわれわれ、独裁者に対するわれわれ、外国の植民地主義的支配に対するわれわれをさす漠然としたシンボルと言えよう。

これらの被抑圧者を示すシンボルの対極にあるのが、カテゴリー10の抑圧者に関するシンボルである。これらのシンボルも被抑圧者の場合と同様、たいてい具体的な階層や人物を明示せずを使用している。頻繁に登場する抑圧者対被抑圧者という対立の構図は抽象的なものである。革命後の4年生の教科書の例を紹介する。

「私たちのジハード(聖戦)には、ある特定の型や方法があるわけではない。私たちのジハードは、ある時には、情熱をもった勇者や若者が用意された武器を持って、敵との戦いに出掛け、革命の成果を守り、裏切り分子や反革命を処罰する軍事活動である。この戦

いは、略奪された人々や被抑圧者の救済のために圧政者や植民地主義者の支配に終止符を打つというジハードの一つの型である」(註14)。

シャーの時代の教科書にはカテゴリー10に相当するシンボルはほとんど見当たらないが、わずかに、農地改革に触れた「章」で、地主に批判的な記述が見られる(註15)。

カテゴリー11のイスラームに関するシンボル(すなわちスンニー派、シーア派に共通したシンボル)は、カテゴリー12のシーア派固有のシンボルと同様に革命後飛躍的な増加を示している。イランは、革命以前からイスラームを国教としていたが、神やモスクなどのごく限られたシンボルしか使用されていないところからも、あまり宗教を重視していなかったことがわかる。これに対して、あらゆる領域でのイスラーム化を提唱している革命後の政権は、国語の教科書にも多くの宗教用語を導入し、イスラーム化を図っている。教科書の随所に神を表すシンボルが登場するようになり、イスラームの教えや歴史を正面から扱った「章」が設けられた。教訓的な物語の主人公は預言者モハンマドやいずれかのイマーム(註16)である。預言者モハンマドのシンボルは138回、シーア派のイマームを表すシンボルは107回も登場している。これは、アッラーの神を示すシンボルの183回につぐ使用頻度の高さである。宗教的な物語をつうじてあるべきムスリム像が描かれ、また、何をし、何をしてはならないかが教えられている。たとえば、2年生の教科書では、第9章「平等」、第17章「おとうさんとおかあさんのために良いことをしましょう」、第33章「子供たちに親切だった私たちの預言者」、第37章「労働者の権利」でこのような教訓的な話を扱っている。

イスラームを主題とする物語の舞台の多くが、イスラーム発祥の地であるメッカやメディナな

ど、アラブの地であることも注目に値する。革命以前の教科書ではイスファハーンやシーラーズなどイランの輝かしい歴史の刻まれた土地がたびたび紹介され、イランの歴史に対して誇りが持てるように配慮されていた。3年生の教科書の第27章、第28章「シーラーズへの旅」、4年生の教科書の第8章「イスファハーン」からの手紙がそれにあたる。ところが、革命後は、自国の文化や伝統を伝えようとする章が著しく削減された。とくに、イランを支配してきた歴代の王に関係のある遺跡や土地に対する言及は極力避けられている。

カテゴリー13の道徳的価値を表すシンボルもまた革命後、かなり増加している。これらのシンボルには「忠実」「忍耐」といった個人の行ないに対するものと「自由」「公正」「権利」などの社会的なものが含まれているが、後者が全体の約67%を占めている。なかでも特に目立つのが「自由」に関するものである。教科書の随所に革命は自由のためであり、革命によって自由を得たと述べられている。以下はその一例である。

「怒りと叫びがついに独裁者を倒し、イラン国民は勝利と自由に到達した」(註17)。

「《イスラーム共和国の日》はイスラームの勝利の日であり、私たち抑圧に苦しむ国民の自由の春の始まりである」(註18)。

カテゴリー14のマイナスの道徳的シンボルは革命後、使われるようになった。先に述べた抑圧者対被抑圧者の場合と同様に、道徳の領域においても善と悪の二元的な対比が見られる。次に紹介するのは革命後の4年生の教科書の一節である。

「ある人たちは、神の命令に忠実であり、良い行ないをするよう努力し、いつも神を忘れない。行ないの正しい人と友人になり、彼らの導きで多くの良いことをする。良いことにおいて抜きんでる。友人や隣人を助ける。人々を救い、被抑圧者を守る……。抑圧者と無宗教の者がいる。神と預言者の命令を受け入れず、

実践しない。神を忘れてる。良いことをしない。罪深く、非道徳で行ないが悪い。そして、人のものを力づくで奪う」(注19)。

カテゴリー15, 16の外国および外国人に対するシンボルにも変化が見られる。革命前は西洋のさまざまな国々に言及されていることからわかるように西洋指向であったが、革命後は非西洋諸国それもとくにメッカやメディナなどイスラームとのかかわりの深いアラブの諸都市がより多く登場している。革命後の教科書での外国の扱いで最も興味深いのは、イスラエルとパレスチナである。これは、革命後の2年生の教科書にある「難民の子供からの一通の手紙」と題する「章」からの抜粋である。

「あなたは私を知っていますか。私はあなたと兄弟です。私はパレスチナ人です。私たちはムスリムで、パレスチナの子供たちです。わたしたちの国の名はパレスチナで、あなた方の国の名はイランです。あなた方は自分の国で、自分の家で暮らしています。けれども、私たちは砂漠で難民になっています。なぜならば、敵が私たちの家や祖国を占領してしまっているからです。……あなた方の革命が勝利して以来、私たちの敵は非常に恐れています。そして、まさにその理由で、私たちがより一層苦しめ、困らせていると言わねばなりません。

私たちの敵はイスラエルです。イスラエルは、私たちの敵であり、あなた方の敵であり、自由な人間すべての敵です……」(注20)。

これに非常に似た内容のものが、3年生の教科書にもある。「パレスチナの青年」と題するこの「章」の終わりに、次のような一節がある。

「兄弟よ、これは、私の心を押し潰し、自由な人間の心をだめにしてしまう苦しみです。私は、私の祖国と家、ムスリム、そして英雄の国を助けるために、ともに戦う者を求めています。あなた方、兄弟よ、どのように私たちをこの道で助けてくれるのでしょうか」(注21)。

最後に、カテゴリー17について触れておきた

い。革命前のほうが開発、発展への言及の頻度はやや高いが、あまりはっきりとした差はここからは読み取れない。少なくとも現政権が発展に対して否定的でないことがわかる。近代化そのものを売り物にしてきたシャーは、白色革命をはじめとする数々の近代化政策を打ち出してきた。これらを示すシンボルは、シャーの功績として強調されてきた。革命後は、農村開発に従事している農村聖戦復興隊が、現政権の誇る活動の一つとして紹介されている。

(注1) イラン最大の民族叙事詩人フェルドゥーシーによる『王の書』はイランの神話、伝説、歴史を集大成したものであり、イラン建国からササン朝滅亡に至る4王朝歴代50人の王者の治世が述べられている。『イスラム事典』平凡社 1982年 324, 202~203ページ。

(注2) 『イスラム事典』291ページ。

(注3) *Fārst: sevjom davestān* (1974~1975) [ペルシア語: 小学校3年生], 134~135ページ。

(注4) *Fārst: sevjom davestān* (1982) [ペルシア語: 小学校3年生], 144~146ページ。

(注5) Matini, Jalal, "Negating the Past," *Index on Censorship*, 第14巻第6号, 1985年, 43ページ。

(注6) 2大名作『果樹園』、『薔薇園』の著者。実践道徳の詩人。1256年没。

(注7) イラン最高の叙情詩人。神秘主義詩人。1390年没。

(注8) 「ペルシア詩の父」と呼ばれた詩人。940年没。

(注9) *Fārst: chahārom davestān* (1970) [ペルシア語: 小学校4年生], 54ページ。

(注10) *Fārst: dovvom davestān* (1981) [ペルシア語: 小学校2年生], 115ページ。

(注11) *Fārst: chahārom davestān* (1982) [ペルシア語: 小学校4年生], 194~195ページ。

(注12) *Fārst: avval davestān* (1985) [ペルシア語: 小学校1年生], 95ページ。

(注13) *Fārst: panjom davestān* (1985) [ペルシア語: 小学校5年生], 112ページ。

(注14) *Fārst: chahārom davestān* (1982) [ペル

シア語：小学校4年生], 36~37ページ。

(注15) *Fārsī: chahārom davestān* (1970) [ペルシア語：小学校4年生], 102ページ。

(注16) 預言者モハンマドの血をひくシーア派の最高指導者。歴史的には12人存在したと考えられている。

(注17) *Fārsī: sevjom davestān* (1982) [ペルシア語：小学校3年生], 157ページ。

(注18) *Fārsī: chahārom davestān* (1982) [ペルシア語：小学校4年生], 129ページ。

(注19) 同上書 57~58ページ。

(注20) *Fārsī: dovjom davestān* (1981) [ペルシア語：小学校2年生], 48~50ページ。

(注21) *Fārsī: sevjom davestān* (1982) [ペルシア語：小学校3年生], 104~105ページ。

結 論

先に行なった各カテゴリーごとの比較によって明らかになった革命後の教科書の特徴をふまえ、ここでは、革命後のいわば公認のイデオロギーとして子供たちに教えられてきたものの全体像を確認しておきたい。

革命後の教科書は次の点で革命前の教科書とは異なっている。第1に、非常にはっきりしたかたちで、こうあるべきだという道徳的価値を示している。すでに見てきたように、それは良きムスリムとなることである。良きムスリムとは預言者モハンマドやイマームのように振る舞うことである。重要なことはそのなかに殉教という行為が含まれている点である。この信仰のために命を投げ捨てる殉教という行為が、国家を守るために命を捨てること、つまり殉国と結びつけられ、さらに、良きムスリムであるために要求されるさまざまなことがらのなかで、これが最上のこととして強調されている。それは、前節で紹介してきた抄訳に端的に表れている。

第2に、殉教がムスリムとしての最高の行為で

あることを確信できるような世界観を呈示している。それは、革命後の教科書の随所に見られる善悪二元論的な世界観である。道徳のレベルでの善と悪は、政治のレベルでは被抑圧者と抑圧者となる。パレスチナとイスラエルの対立の構図も善と悪の対立として単純化されている。このほかにも「裏切り分子」「反逆者」「反革命」などのような悪のシンボルが数は少ないが使用されている。このような世界に対するイメージは、悪のシンボルを具体的に定めることで、より活性化される。そして、さまざまな悪、言い換えれば敵が存在することで殉教のもつ意義が明らかになる。

第3に、イランの歴史をイスラームの歴史として描いている。旧体制下ではイランの歴史はそのまま王たちの歴史として描かれてきた。時代的にはイスラームが侵入する7世紀以前が強調された。現在は、このような王を主体とする歴史認識は完全に否定されている。革命後の国語の教科書を見るかぎりでは、歴史的な物語は、預言者モハンマドやイマームの活躍を主体に描かれているため、その舞台の多くはイランにはなく、メッカ、メディナ、クーファなどのアラブの地にある。しかし、イマームが多く登場すること、特に、シーア派の原点とも言われるホセインとヤジードの戦いが2年生の教科書の第28章に掲載されていることで、シーア派としての歴史が語られている。

第4に、栄光に満ちた過去、偉大な王たち、輝かしいペルシア文化、このような過去の伝統によって支えられていたシャー時代のイラン人意識に代わって、イスラームのみを真実とし、革命を成し遂げ、イスラーム共和国を樹立したという自負、つまり過去にはなく現在のイランに支えられたイラン人意識を前面に押し出している。この新しいイラン人意識はイスラームのみを正当性の

根拠としている点でイランという1国の枠を越える可能性を持っている。ホメイニーらがイスラーム革命の輸出を叫び、アラブのイスラーム諸国やパレスチナなどとの連帯を訴えるとき、スンニー派、シーア派の隔たりを越えた同じイスラーム教徒であることが強調される。だが、一方で、イラクとの戦いを遂行していくうえで、イランという国家に属するイラン国民としての自己認識を強調していかなければならない。イラン・イラク戦争を戦い抜くには、強烈な祖国愛が必要だからだ。現在、多くの若者をイラン・イラク戦争に駆り立てているのは、まさにそのような祖国への思いであるという。この点について上岡弘二はつぎのように説明している。

「革命以前も以後も、イラン人に国民的アイデンティティーを与えている第1のものは、アラブなどの非イラン人に対するイラン人意識である。いわゆるイラン・イスラーム革命で政権の座についたホメイニー師を頂点とする聖職者政権は、この《イラン人意識》を《イスラーム教徒意識》に置き換えようと努力してきた。この志向の背景には、ひとつには、それまでの王制が、国王賛美の手段として過去の栄光のみで飾られた《イラン人意識》を極端なまでに強調してきたという事情があったのも事実である。しかしそのほかに、実は“イスラーム”革命勝利の余勢をかって、イラン常民にも《イスラーム教徒意識》のアイデンティティーだけで十分とする、聖職者階級特有の思い上がりがあったのも事実である」^{〔注1〕}。

第5に、新聞をはじめとするあらゆるメディアに氾濫している帝国主義のシンボルであるアメリカ^{〔注2〕}、ソ連、そして目下の最大の敵であるイラクの名が、教科書には一切登場しない。小学校の朝礼では「アメリカに死を、ソ連に死を、勝つまで戦いを、」の決まり文句が叫ばれているにもかかわらず^{〔注3〕}、教科書では触れられていない。敢えて触れられていないとすれば、米ソという超大国に対する配慮と、いずれはイラクとの戦争も終

結させなければならなくなるだろうという見通しによるものと思われる。だがその際に、国民の団結と動員を維持するための敵の存在を失うわけにはいかない。第IV節で紹介したイスラエルに対する教科書での厳しい扱いかたをみると、シンボルの使用頻度こそ少ないが、シーア派、スンニー派に共通する全ムスリムの敵であるイスラエルを悪のシンボルとして描くことで埋め合わせをしようというのが現体制の意図ではないだろうか。

新聞、テレビ、ラジオなどのマスメディアによる政治宣伝やモスクでの説教が即時的な効果を狙っているのに対して、教育は長期的に体制を維持していくための投資である。したがって、そこには現在のイランのイデオロギーが表れているとともに、将来の方向も暗示されている。

〔注1〕 上岡弘二「イラン人の宗教世界」（上岡弘二・中野曉雄・日野舜也・三木亘編『イスラーム世界の人びと——1 総論——』東洋経済新報社 1984年）151～152ページ。

〔注2〕 カテゴリー16に登場しているアメリカのシンボルはエジソンを紹介した時に使われているもので、特別の意味を含んでいない。

〔注3〕 『朝日新聞』1984年2月19日（朝刊）。

〔付記〕 本稿執筆後に次のような論文が発表されたので、関心のある方は御参照されたい。山田邦子「小学校国語教科書からみたイラン」（『通信』〔アジア・アフリカ言語文化研究所〕第56号 1986年3月25日）。

（上智大学大学院）

使用されているシンボルの頻度表

カテゴリー 1: 国家に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5	
イラン・イラン人	Īran (i)	24		20	32	34	110	18		10	19	8	55
イラン人 (複)	Īrāniyān			6	3	8	17			2		1	3
イラン国民	mellat-e Īrān								2	1			4
祖国	mihān	4			5	6	15	5			3	5	13
祖国 ^り	vatan				1	4	5			1		4	5
国家・国民	mallat (hā)					2	3				9	8	17
イラン国旗	parcham-e Īrān	4	1	3	1		9						
三色旗 (イラン国旗)	parcham-e se rang				1		1						
国旗	parcham	3		16			19						
国歌	sorūd-e melli				1		1						
イラン国歌	sorūd-e Īrān				1		1						
合 計		35	1	47	45	53	181	23	2	14	32	26	97

カテゴリー 2: パフレビー国王一族に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5	
皇帝 (王の中の王)	shāhanshāh	7		12			19						
皇帝 ^の	shāh-e Āryāmeh̄r			2			2						
皇帝 ^の	valāhezrat	2					2						
イラン皇帝	shāhānshāh-e Īrān			4			4						
シャー	shāh	3		10	6	30	49	5		1			6
王	pādshāh	6		2	12	14	34					3	3
シャー	shāhānshāh-e Āryāmeh̄r			5		1	6						
パフレビー	Pahlavī			1	1	1	3						
モハンマド・レザー・シャー	Moḥammad Rażā shāh			1			1						
レザー・シャー・パフレビー	Reżā shāh Pahlavī	2				1	3						
レザー・シャー	Reżā shāh-e Kabīr			2	3		6						
王妃	shāhbānu	6		8		2	16						
皇太子	valī'ahd			8			8						
王子	shāhzādeh			8			8						
合 計		26	24	42	22	47	161	5	2		3		10

カテゴリー 3: 歴史上の王・王朝に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5	
アケメネス朝	Hakhamanesh				1	3	4						
ササン朝	Sāsānī					4	4						
サーマン朝	Khāndane Sāmānī					1	1						
サファビー朝	Safāvī				1		1						
クセルクセス	Khashayārshā			1	1		2						
アッバース	shāh' Abbās					3	3						
スレイマン	Soleymān					1	1						
ダリウス	Daryush (Dārā)				2	1	3						
キュロス	Kurush					1	1						
アルデシール	Ardešīr					1	1						
合 計				1	8	12	21						

カテゴリー 4: 神話・伝説上の人物に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計		
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5			
ロスタム	Rostam			9	1	40	50								
ジャムシード	Jamshīd			3	6		9								
カーブース・シャー	Kāvūs shāh				4	4	8								
フェリドゥーン	Ferdūn				17	1	18								
ソフラーブ	Sohrāb				1		1								
ザッハーク	Zakhāk				34		34								
アーリマン (悪神)	Ahryman				7	1	8						1	1	
合 計				12	70	46	128						1	1	

カテゴリー 5: 王に関する一般的なシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計		
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5			
王者の	shāhāneh					1	1								
玉座	takht				2	3	5								
玉座 ⁹⁾	takht-e shāhī					3	3								
王冠	tāj					1	1								
宮殿	kākh					1	1								
王宮	kākh-e shāhī					1	1								
城	qasr						2								
合 計				2	9	3	14								

カテゴリー 6: 祭日に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計	
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
ノウ・ルーズ	nourūz	1	5	3			9	7	2	5	3			17
シズダ・ベダル	sīzdah dedar		4				4							
チャハール・シャンベ・スウリー	chahār shanbeh surī		4				4							
ジャシネ・サデ	jashne sade			1			1							
メヘルガーシ	mehergān		5	2			7							
イスラーム共和国記念日	rūz-e jomuhūrī-ye eslāmī							4	1					5
合 計		1	18	6			25	7	6	6	3			22

カテゴリー 7: イランの文化・文化人に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					計	革 命 後					計	
		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
イブン・シーナー	Abū' Alī Sīnā			5			5			5				5
フェルドゥーシー	Ferdousī			9	4	4	17			5	2	1		3
『王の書』	Shāhnāme			2	3	9	14							
サアディー	S'adī			5	15	3	23			1	1	5		7
『ゴレスターン』	Gorestān				7	1	8						1	1
『ブースターン』	Būstān					3	2						2	2
ハーフェズ	Hāfez				4		4							
ルーダキー	Rūdakī						8							
ゾロアスター	Zartosht					1	1							
拝火神殿	āteshkadeh					4	4							
合 計				25	37	27	89			6	3	9		18

研究ノート

カテゴリー 8: 革命のシンボル

シンボル	学年	革命前						革命後					
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
イスラーム革命	enqlāb-e eslāmī							3	1	1			5
イスラーム共和国	jomhūrī-ye eslāmī							1	5	1	4	1	12
イスラーム政府	hekūmat-e eslāmī									1			1
革命	enqlāb (f)								2		6		8
革命評議会	shourā-ye enqlāb										1		1
独立	esteqlāl							1			1	2	4
チャードル	chādor									1			1
殉教者	shahid (ān)							1	3	10	1	14	29
殉教者 (複)	shohādā									4	1	1	6
殉教	shahādat										2	4	6
抗議	'eterāz									1			1
抵抗	istādegī											1	1
抵抗 ¹⁾	esteqāmat											2	2
ホメイニー	Khomeynī							5	3		4	1	13
指導者	rahbar (f)							1	2	5	4	1	13
イスラームの勝利	pīrūz-e eslāmī										1		1
勝利の戦士	mojāhedān-e pīrūz									1		1	2
戦士	mojāhedān										1	1	2
押し付けられた戦争	jang-e tahamīl											1	1
反逆者	kheyānatkār									1			1
裏切り (分子)	'avāmel-e khāy' en									1	1	2	4
裏切り	kheyānat										1		1
シャーに黙従する人々	sar separdgān-e shāh									1			1
反革命	zedd-e enqlāb										1		1
合計								12	15	26	31	30	114

カテゴリー 9: 被抑圧者に関するシンボル

シンボル	学年	革命前						革命後					
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
抑圧にあえぐ	setamdideh									1	2	1	4
抑圧に悩む人々	setamdidehgān					1	1			2	4		6
貧困者	darumāndegān									1			1
貧しい (人々)	tohidast (ān)				3		3				2	1	3
貧しい	faqīr										1		1
貧しい ²⁾	bīchīz				1		1						1
迫害された	māzlūm									1		1	2
剝奪	mahrūmīn									1			1
剝奪された	mahrūm									1			1
モスタザフィン	mostaz' afyn									1			1
弱者	za'īf(ān)											1	1
保護のない人々	mardom-e bīpanāh										2		2
合計					4	1	5			8	12	3	23

カテゴリー10: 抑圧者に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					革 命 後						
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
圧制 ⁶⁾	setam				2		2			1	6	4	11
圧制 ⁶⁾	bidād				3		3						
圧制者	setāmkār (ān)								1	7	3		11
圧制者 ⁷⁾	mard-e setāmkār								1	1	3		5
圧制者 ⁷⁾	setamgar				7	4	11			1	8		9
抑圧	zōlm							1		1		2	4
専制君主	zālem				2		2				6		6
植民地主義者	este'margar (ān)										1		1
権力者	zūrmandān										1	1	2
権力者 ⁸⁾	qodratmandān											1	1
専制君主	zūrgū (yān)										4		4
独裁政治	estebdād										1	1	2
ファラオ (圧制者)	Fer'oun (yān)										21	23	44
地主	mālek (ān)				3		3						
(村の)所有者	arbāb-e (deh)				2		2						
合 計					19	4	23	1	4	49	46		100

カテゴリー11: イスラームに関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前					革 命 後						
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
神	khodā	13		4	8	17	42	18	15	30	60	39	162
神	khodāvand					6	6		1	1	2	8	12
神 ⁹⁾	parvardgāh					1	4				5	3	8
アッラー	allāh										1		1
神は偉大なり	allāh akbar							2		1		1	4
おお神よ	khodāyā	3				1	4	3				1	4
神の下僕	bonde khodā											2	2
神から与えられた	khodādād									1			1
預言者	piyāmbār [I]								3	6	16	34	59
預言者 ¹⁰⁾	peyqambar [I]	5				1	6	5		5	1	6	17
使徒	rasūr									2	7	9	18
使者	piyāmāvar										2	1	3
ムスリム	mosalmān [ān]	2					2	7	3	11	5	16	42
イスラーム	eslām [I]	1					1	2		9	4	22	37
モスク	masjed			2	3	1	6			2	3	14	19
礼拝	namāz					1	1	1		9	1	1	12
礼拝 ¹¹⁾	'ebādāt									6	2		8
礼拝所	namāzkhāne											1	1
カーバ	k'abah							1				2	3
信仰	Imān					1	1			5	6	9	20
信心	khodā parastī									1	1		2
宗教	dīn	2				1	3	2		5	15		22
宗派	mazhabī					1	1					1	1
一神教	yegāneh parastī										1		1
神の唯一性	touhīd									2			2
唯一神	khodā yagāneh										1	1	2
コーラン	qorān	7				1	8	8	2	6		5	21
ジハード	jihād										9		9
最後の審判	jahān ākherat										1	3	4
復活 (の日)	[rūze] qiyāmat										1	2	3
天国	behesht									1		1	2
禁欲	parhiz									1			1
如法の	halāl											1	1
ハッジ (メッカ巡礼)	hajj							2		4			6
犠牲祭	'id-e qorban							3			1		4

研究ノート

カテゴリー16: 外国および外国人に対するシンボル (西洋諸国)

シンボル	学年	革 命 前						革 命 後						
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計	
イタリア	Ītaliyā				3	2	5					2	2	
スイス	Sūisu				2		2					2	2	
オランダ	Holand				2		2					2	2	
デンマーク	Dānmārk						2					2	2	
イギリス	Engelestān			2			2							
フランス	Frānseh				1		1							
フランス人	Frānsavi				1	1	2							
ロシア	Rūsfeh				1		1							
ヨーロッパ	Orūpā				1	4	5					2	2	
オーストラリア	Osutralyā				1	1	1							
アメリカ	Omūrikā						8					1	1	
スペイン	Espānyā						8						1	
ポルトガル (人)	Portghāl (i)						6							
パリ	Pāris				1		1							
ロンドン	Landon				1		1							
ニューヨーク	Nyuork											1	1	
合 計					2	12	32	46				6	4	10

カテゴリー17: 開発・発展に関するシンボル

シンボル	学年	革 命 前						革 命 後					
		1	2	3	4	5	計	1	2	3	4	5	計
進歩	taraqi			2	1		3				1	1	2
発展	pīshraft			1	2		3			1	1	1	3
開発	touse'h				2		2						
発見	kashf				4		4		5		1		6
発見者	kāshef				1		1				1		1
発明	ekhterā'e		1		2		3		1		2		3
発明家	mokhtar'e (ān)				2		2				2		2
石油	naft						17				13		13
工業発展	pīshraft-e san'at					1	1					1	1
エジソン	Edīsūn						18					18	18
国家開発拡張部隊	sepāhi-ye tarvij va ābādāni				3	1	4						
国家識字教育部隊	sepāhi-ye dānesh				3		3						
農村協同組合	sherkat-e t'aavoni rūstāi				3		3						
農業開発	tarvij-e keshāvarzi					1	1						
国王と人民の革命	enqelāb-e shāh va mardom				1		1						
1341年(1962年)バフマン月6日(農地改革の布告日)	sheshom-e Bahman(māh)1341						10						10
農村聖戦復興隊	jihād sāzandegi										5	2	7
合 計		0	6	3	51	21	81	0	6	1	26	23	56

(注) 1) mihān と vatan はともに祖国, 母国, 自国をあらわす同義語。2) Āryāmehr は「アーリア人の太陽」という意味であり, 1965年在位25周年を記念して議会在シャールにおくった称号。「王の中の王」とともにシャールにつけられた称号。3) 同義語。4) istādegi は抵抗, 不動。esteqāmat は抵抗, 忍耐, 不屈。5) いずれも「貧しい」の同義語とされている。6) setam と bidād はともに圧制, 不正, 専制をあらわす同義語。7) いずれも setam (圧制) をもとにした同義語。8) zūrmandān は権力, 暴力, 強制。qodratmandān は権力, 能力, 権威。9) khoda は神, 神性。khodāvand は主 (the Lord), 神, 主人。parvardgāh は神, 育成者 (the nourisher)。10) 同義語。いずれもマハンマドをさす。11) namāz は祈り, 礼拝。'ebādāt は崇拜, 礼拝。12) いずれも公正, 正義をあらわす同義語。13) 同義語。14) 同義語。——(使用辞書: A・K・アリアンプール; M・K・アリアンプール著『ペルシア語英語辞典』名著普及会 1983年)。なお, 各シンボルの日本語に特に () が添えられていない場合, ペルシア語表記の語尾についている (ān), (hā), (yān) は複数 を, (i) は形容詞を含むことを意味している。